

(様式1)

「課題発見・解決に向けた主体的・協働的な学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成28年度委託事業完了報告書【総括】

都道府県名	三重県	番号	24
-------	-----	----	----

推進地区名	協力校名	児童生徒数
志摩市	神明小学校	227人

※ 児童生徒数については、今年度、協力校に在籍する児童生徒数を記述する。

## ○ 実践研究の内容

### 1. 推進地域における取組

(1) 全国学力・学習状況調査（以下「全国学調」という。）、みえスタディ・チェック及び課題解決に向け作成したワークシート（以下「3点セット」という。）等を活用した指導改善の取組への支援

#### ① 全国学調の活用

全国学調の自校採点をとおして、児童生徒の学力の状況を把握し、早期からの授業改善や個に応じた指導につなげるため、県内の小中学校教員、市町等教育委員会の指導主事を対象に自校採点研修会を県内4会場で実施した。当該研修会では、自校採点の意義、解答類型を活用した分析、データに基づく授業の検証や自校採点以降の授業改善サイクルの構築等について研修した。

また、自校採点結果の集計や分析に基づくワークシート等を速やかに学校に提供し、早期からの授業改善のPDCAサイクルの確立を促進している。

#### ② みえスタディ・チェックの活用

小学校第4、第5学年及び中学校第1、第2学年において、児童生徒の学習内容の定着状況を把握し、早期の授業改善及び個に応じた指導の充実等、各学校が組織的かつ継続的なPDCAサイクルを確立するために、学習指導要領に基づき、各教科の目標及び内容に即した、みえスタディ・チェックを実施した。

#### ③ ワークシートの作成、配信

小中学校の教員等が参加する教科別プロジェクトチームを設置して、知識・技能を活用する力の定着状況を確認する問題を中心としたワークシートや、全国学調やみえスタディ・チェックの結果に見られる課題に対応したワークシートを作成、配信し、授業改善を促進した。あわせて、児童生徒一人ひとりの達成感に結び付け、学習意欲の向上を図った。

(本年度 392 本作成 /H26 まで : 711 本→H27 : 1222 本→H28 : 1614 本)

#### ④ 授業改善サイクル支援ネットの開設

全国学調やみえスタディ・チェックの採点結果の集計にあたっては、授業改善サイクル支援ネットの開設による集計の効率化で、より早期からの授業改善につなげている。

### (2) 国の調査官を招へいした研修会等の充実

#### ① 講演会（小学校国語・算数・理科、中学校数学・国語）を開催した。

・学習指導要領で求められている力の育成とともに、全国学調の実践や活用方法などについても、調査官から直接話をしてもらおう等、考え方を共有。

※昨年度より小学校理科、中学校数学、中学校国語を追加

#### ② 5地域（桑名市立城南小学校、朝日町立朝日小学校、津市立白塚小学校、大紀町立大紀中学校、玉城町立田丸小学校）で、公開授業を中心とした実践的な研修会（小学校国語・算数・理科、中学校数学）を開催した。

・小学校国語 … 水戸部 修治 調査官

・小学校算数習熟・算数TT … 笠井 健一 調査官

・小学校理科 … 山中 謙司 調査官

・中学校数学 … 水谷 尚人 調査官

### (3) 推進地区及び協力校への総合的な支援

学力向上アドバイザー（教科等の指導や学校マネジメントについて専門的な知識と豊富な経験を有する退職校長）等を学識経験者として、志摩市学力向上検討委員会に派遣し、全国学調の分析結果から見えてくる課題から、授業改善や具体的な授業実践について、指導・助言を行った。

また、協力校へ県の指導主事等を派遣し、3点セットの効果的な活用や、「めあて」「振り返る活動」の質的な充実等の授業改善について、指導・助言を行った。

## 2. 推進地区における取組

### (1) 志摩市学力向上検討委員会

全国学調の分析やそれに基づく授業改善を目的とし、教育長、小中学校校長会の代表者2名、教頭会の代表者1名、各校研修担当者1名、学識経験者1名の27名で構成し、年4回開催した。

### (2) 学力向上推進部会（協力校が本事業を進めるために校内に設置、（以下「部会」という。））における指導・助言

研究課題に迫るため、志摩市教育委員会の指導主事が定期的に協力校を訪問し、部会において指導・助言を行った。部会では、全国学調において課題が見られた算数科に焦点を絞って授業改善を図っていくことを、校内の学力向上の中心的な取組にすることとした。

### (3) 学校参観における指導・助言

部会において確認したことの検証や学習支援サポーターとの懇談を目的とし、定期的に訪

問した。訪問では、算数科の授業だけでなく、朝の学習、休憩時間等の様子を参観し、効果的な少人数指導のあり方など実態に応じた具体的な指導・助言を行った。

### 3. 協力校における取組

- (1) 全国学調、みえスタディ・チェックの採点を全教員で行うことにより児童の様子を学校全体で把握するとともに、自校の強み、弱みについても校内研修で交流し、学校の成果と課題を把握した。また、レディネステストやアンケート、単元ごとの確認テスト等を実施することで、個々の児童の習熟度や課題を的確に把握した。

学習支援サポーターを活用し、把握した個々の児童の習熟や課題に対応した学習支援を行った。

- (2) 視覚的支援の充実を図るため、拡大図を準備したり、具体物を操作させたりするなどの指導の工夫を行った。

また、毎時間の振り返る活動を充実するとともに、ノートの点検や練習問題点検を必ず行い、児童の満足度、学習内容の定着状況、学習意欲等を把握した。

- (3) 休み時間等を活用し、担当者間の連携を行い、指導方法や評価情報を共有し、授業改善に取り組んだ。

## ○ 実践研究の成果

### 1. 協力校における取組の成果

- (1) 全国学調、みえスタディ・チェック、レディネステスト、アンケート、単元ごとの確認テスト等をもとに、児童の実態を的確に把握することで、より効果的な授業改善や学習支援サポーターの活用につなげることができた。

- (2) 算数の授業において学習支援サポーターを活用することにより、「算数の授業がよく分かる」という児童の割合が、大きく増加（70.9%→75.8%）した。特に、学習支援サポーターを活用している4・5年生においては、同様の質問に対し、「そう思わない」と答えた児童はいなかった。また、児童の実態を的確に把握し、効果的に学習支援サポーターを活用することで、算数に対する学習意欲の向上につながっている。

### 2. 実践研究全体の成果

#### (1) 3点セットの活用

- ① 市町教育委員会指導主事を対象とした「学力向上推進会議」や「自校採点研修会」の開催を通して、全国学調の活用が昨年度からさらに進んだ。その結果、組織的・継続的な授業改善のPDCAサイクルを活用した取組が一層推進された。

協力校においては、全教師で採点することにより児童の成果と課題を学校全体で把握することで、早期からの授業改善や学習支援サポーターの効果的な活用につながった。

- ② みえスタディ・チェックを実施し、自校採点を実施することで、課題を把握し、授業改善につなげる取組が進んだ。

協力校においては、みえスタディ・チェックや全国学調の結果から、その課題を解決するための指導方法の工夫、改善を行い、その成果について定量的に検証を行うなど、授業改善の充実を図ることができた。

- ③ 全国学調やみえスタディ・チェックの結果に見られるみえの子どもたちのつまずきに対応したワークシートを提供し、活用の促進を図ることにより、児童生徒一人ひとりの課題の改善を図り「やればできる」等の達成感に結びつけ、学習意欲の向上につなげることができている。

協力校においても、全校で児童の課題に対応したワークシートの活用により、学力の定着を図っている。

## (2) 「目標（めあて・ねらい）の提示」と「振り返る活動」の周知・徹底

県の指導主事等による学力定着に課題を抱える小学校への学校訪問や全中学校への学校訪問、国の調査官を招へいたした「授業改善研修会」等の開催により、「目標（めあて・ねらい）の提示」、「振り返る活動」を位置付けた授業が広く実施されるようになった。

## (3) 学習支援サポーターの活用効果

みえスタディ・チェックの結果における、協力校5年生の算数の平均無解答率は、第1回（学習支援サポーター活用前）が三重県の平均無解答率よりも高かったが、第2回（学習支援サポーター活用後）は第1回と比較しても大きく改善され、三重県の平均無解答率よりも低くなっている。

このことは、諦めずに粘り強く取り組もうという姿勢が育まれたと考えられ、さらに小学校5年生の実態を的確に把握し、個々の児童の課題に対応した効果的な学習支援サポーターの活用により、児童の学習意欲の向上に結び付いていると考えられる。

### 【協力校における、みえスタディ・チェック（小学校5年生・算数）結果】

平均無解答率（％）

	第1回	第2回
協力校	5.6	2.2
三重県	5.3	3.4

## 3. 取組の成果の普及

### (1) 合同成果発表会の開催

平成28年度「わかる授業」促進事業及び平成28年度「課題発見・解決に向けた主体的・協働的な学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」合同成果発表会を開催し、当事業の推進地区志摩市及び

協力校神明小学校の取組を発表、共有し、普及を図った。

## (2) 取組資料の配付

平成28年度「わかる授業」促進事業及び平成28年度「課題発見・解決に向けた主体的・協働的な学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」合同成果発表会において、当事業の推進地区志摩市及び協力校神明小学校の取組資料を配付

## ○ 今後の課題

### (1) 学習支援サポーターの継続的な活用と学力定着について

学習支援サポーターを効果的に活用することで、児童の学習意欲の向上には一定の成果が見られており、引き続き、その効果的な活用について実践研究を進め、確かな学力の定着という面での成果に結びつけていく必要がある。その際、習熟度別指導等の少人数指導での学習支援サポーターの効果的な活用について検証していくことが望まれる。

### 【協力校における、みえスタディ・チェック（小学校5年生・算数）結果】

平均正答率（%）

	第1回	第2回
協力校	64.3	51.0
三重県	58.5	47.1
協力校／三重県	109.9	108.3

### (2) 「授業改善の確立」に向けて

#### ① 3点セット等の年間を通じた計画的な活用の徹底

全国学調、みえスタディ・チェック、ワークシートの3点セットを活用した効果的な授業改善サイクルの確立について、具体的な実践事例を収集し、協力校への指導・助言を充実させる。

・「授業改善サイクル支援ネット」により全国学調やみえスタディ・チェックの自校採点集計結果等を速やかに提供し、市町教育委員会と連携して協力校の課題解決に向けた支援を行う。

・ワークシートの活用促進。

・全国学調やみえスタディ・チェックの再活用による定量的な検証に基づいた授業改善の促進

#### ② 子どもたちが、見通しを持って主体的に学ぶことができる授業改善の取組の徹底

・次期学習指導要領を踏まえた主体的・対話的で深い学びの実現のための、国の調査官を招へいた研修会等を開催し、協力校における授業改善の取組を促進

・指導主事、指導教諭等による授業実践の横展開

・県内外の効果的な取組の事例収集及び共有（効果的な少人数指導、効果的な振り返り、復

習につながる宿題の出し方 等)

(3) 「学校・家庭・地域が連携した学力向上の取組の推進」に向けて

みえの学力向上県民運動セカンドステージでは、県民力を結集し、県・市町教育委員会、学校、家庭、地域がともに手を携えて取り組み、学校では授業改善等の取組を深め、家庭・地域では生活習慣・学習習慣・読書習慣の定着の取組を広げ、家庭の状況により対応が難しい問題については、地域による学習支援等により地域で支えるという方向性を基本として取り組む。

- ① 生活習慣・読書習慣等の確立に向け、家庭・地域ワーキングを中心とした生活習慣等の定着を図る取組
- ② 生活習慣・読書習慣チェックシートを活用した年3回の集中取組の実施および児童生徒や保護者・地域へのフィードバック等の活用促進により、生活習慣・読書習慣の確立を促進
- ③ コミュニティ・スクール、地域未来塾の拡充

(様式2)

「課題発見・解決に向けた主体的・協働的な学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成28年度委託事業完了報告書

【推進地区】

都道府県名	三重県	番号	24
-------	-----	----	----

推進地区名	志摩市
-------	-----

○ 推進地区として実施した取組内容

1. 研究課題

知識・技能を活用する力を育成する授業づくり

2. 研究課題への取組状況

(1) 推進地区として協力校の取組を支援する取組内容

①志摩市学力向上検討委員会

全国学力・学習状況調査（以下「全国学調」という。）の分析やそれに基づく授業改善を目的とし、教育長、小中学校校長会の代表者2名、教頭会の代表者1名、各校研修担当者1名、学識経験者1名の27名で構成し、年4回実施した。第1回、第2回は、本事業の実施前ということであるが、本事業の趣旨や後の協力校の取組を視野に入れた研修を行った。本年度の主な内容は、以下の通りである。

・第1回 5月実施

三重県教育委員会事務局指導主事を講師に招き、「授業改善につながる校内研修の推進について」というテーマで研修を行った。教員の学びが、授業力向上、授業改善につながるという考えのもと、教員の学びの場である校内研修をいかに効果的に進めるかについて演習も交えながら研修を進めた。

・第2回 8月実施

三重県教育委員会事務局学力向上アドバイザーを講師に招き、「平成28年度学力調査結果から見えてくること」というテーマで研修を行った。全国学調における志摩市全体のデータ分析から見えてきた強み・弱みを確認し、具体的な授業実践について学んだ。

・第3回 10月実施

「平成28年度全国学力・学習状況調査の分析から改善の取組を考える」というテーマのもと、各校より事前に提出された「分析報告書」を基にワークショップ形式で研修を進めた。課題やその原因となる要素、さらには改善案を出し合い情報共有をす

るとともに、三重県教育委員会事務局学力向上アドバイザーより指導、助言を受けた。  
また、本実践研究を進めるにあたって以下の点について周知した。

〈周知内容〉

- (ア) 志摩市の学力向上に関わって10月より文部科学省の支援を受けながら取組を進めていくこと。
- (イ) 取組については、神明小学校を協力校として具体的に進め、その成果を全小中学校で活用していくこと。
- (ウ) 取組内容、成果と課題については志摩市学力向上検討委員会で報告していくこと。

#### ・第4回 2月実施

本年度の取組の総括として、各校より事前に提出された「効果のある取組」について情報共有を行い当研究事業との相乗効果を図った。

また、三重県教育委員会事務局指導主事を講師に招き、「『めあて』と『振り返り』の充実に向けて」というテーマで研修を行った。めあて、振り返りの必要性を学び、より効果的なものにするために日々の各校の情報共有も含め研修を行った。

本実践研究で効果が見られた神明小学校の次の取組について情報共有を行った。

〈情報共有の内容〉

- (ア) 学校体制を見直し、朝の職員打ち合わせを減らし担任が朝の学習の指導に入る。
- (イ) 既習事項を掲示し、児童が常に復習できるようにする。
- (ウ) 算数科の学習において週2時間学習支援サポーターが授業に入り、子ども一人ひとりのつまずきに対応するなど、個に応じた指導を充実する。
- (エ) みえスタディ・チェックや単元後のテスト等の分析から成果と課題を定量的に検証し、授業改善の指針とする。

#### ②志摩市授業研究指定校事業

授業において特に知識、技能を活用できる力を育成する指導力を身に付けさせること目指し、授業を中心とした実践的な研究を進める。毎年、対象校が研究の成果を発表し、市内教職員の研修の場としている。本年度も小中学校合わせて5校が公開授業を行った。成果と課題については、市教育委員会指導主事内で総括を行い、年度末に向け、校長との懇談を行い次年度の取組へと引き継いでいくこととした。

公開授業は、算数、国語、人権学習等であった。協力校の取組内容として挙げられていた国語科の研究の更なる充実や算数科の授業改善等に関わって、多くの学びを得る機会となった。

本年度の発表校及び研究テーマは以下の通りである。

- ・志摩中学校 『授業のユニバーサルデザインを創造し、すべての生徒の確かな学びを追及する』
- ・国府小学校 『子どもとともに学習問題を創造し、考えの道筋を相手意識を持って表現させ、発問や板書でつなぐ授業』
- ・甲賀小学校 『一人ひとりを大切にし、お互いに認め合える子どもを目指して』



- ・志島小学校 『自ら課題解決に向かい仲間とともに学びあう子どもの育成を目指して』
- ・安乗中学校 『一人ひとりを伸ばし、自ら学ぶことができる生徒の育成』

### ③地域との連携

全国学調における児童生徒質問紙調査から見られる本市の課題については、保護者や地域を巻き込んでの改善が必須である。特にテレビやゲーム、インターネットやスマートフォンの使用方法等については、健康に及ぼす危険や効果的な扱い方について保護者だけでなく、地域へと発信していかなければならない。本年度は、志摩市健康福祉部健康推進課と連携し、全国学調の児童生徒質問紙調査のデータをもとにテレビやゲーム等のいわゆるメディアと生活習慣、自己肯定感との関係について分析を行った。本年度末から来年度はじめにかけて、志摩市の広報でメディアの健康へ及ぼす危険や望ましい付き合い方について市民への周知を図るとともに、教育委員会では、全保護者に対して周知の文書を出すことで計画を進めていく。子どもたちの学習環境の改善については、協力校においても課題の1つとなっている。このような取組が、協力校における改善の取組について1つの方向性を示すことにもなると考えた。

### ④指導主事学習会

現在志摩市には、6名の指導主事が配置されている。学力向上に向け6名が共通理解のもと、各校への指導へ当たっていかなければならない。そのためには、綿密な打ち合わせ、情報共有、指導主事としての学びの場が必要になってくる。本年度から月1回程度「指導主事学習会」を開催し、当事業の推進に取り組んできた。各研修会での学びの交流、志摩市の教育における現状と課題についての意見交流、要請訪問における情報共有等、共通理解を図る時間を設定した。

協力校については、学力、生徒指導、特別支援、人権のそれぞれの担当指導主事が学校訪問をする中で指導・助言した内容を指導主事内で情報共有し、協力校の学力向上に向けて様々な角度から意見交流を行った。

## (2) 協力校への指導・助言状況

### ①学力向上推進部会（協力校が本事業を進めるために校内に設置、（以下「部会」という。））における指導・助言

研究課題に迫るため、定期的に訪問し、部会において指導・助言を行った。部会では、全国学調において課題が見られた算数科に焦点を絞って授業改善を図っていくことを校内の学力向上の中心的な取組にすることとした。

〈主たる具体的な助言内容〉

(ア) 単元に入る前にはレディネステストやアンケートを実施し、児童のつまずきや学習に向かう意識を把握し、単元構想をすること。

(イ) 子どもたちが主体的に授業に臨むことができるよう授業のはじめには、「めあて」を提示し、学んだことを確認し、次の学習につなげるために授業後には「振り返り」を行うこと。

(ウ) 単元後に実施するテスト結果等を分析し、子どもたちの伸びを定量的に見てい

くこと。

- (エ) 板書計画やノート指導について、提示したモデル案を参考に、授業スタイルの統一を図ること。
- (オ) 算数科の授業において週2時間配置される学習支援サポーターの活用の仕方について授業内容に応じて以下のようにすること。
  - ・担任主導の一斉指導の中で学習支援サポーターは子どものつまづきに応じて児童の支援にあたること。
- (カ) 学力向上に向け、算数科の授業だけでなく、学校全体としての取組を行うこと。
- (キ) 昨年度からの国語科における授業改善の取組についても、継続して行うこと。

## ②学校参観における指導・助言

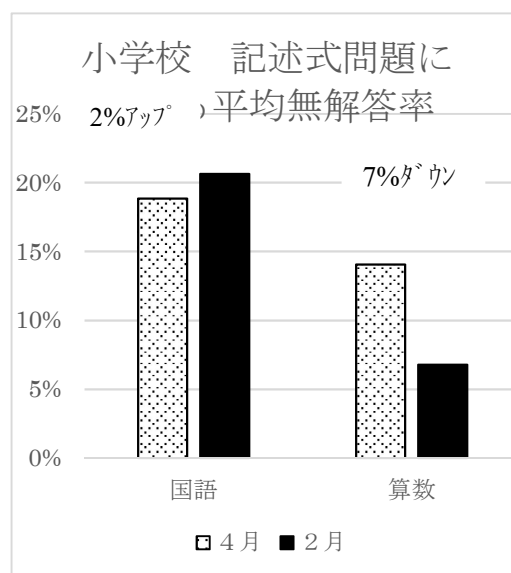
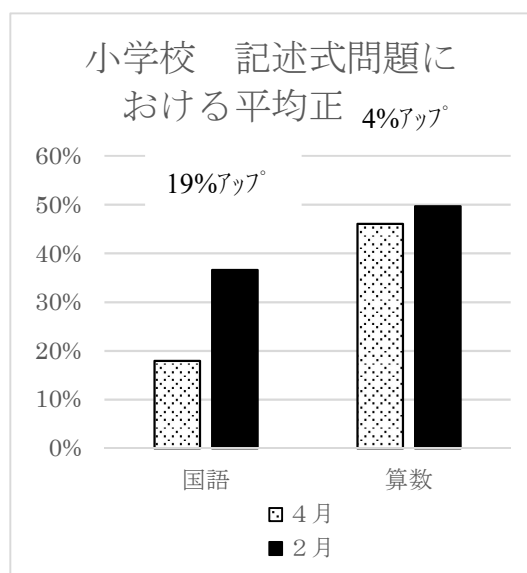
部会において確認したことの検証や学習支援サポーターとの懇談を目的とし、定期的に訪問した。訪問では、算数科の授業だけでなく、朝の学習、休憩時間等の様子を参観し、実態に応じた具体的な指導・助言を行っている。

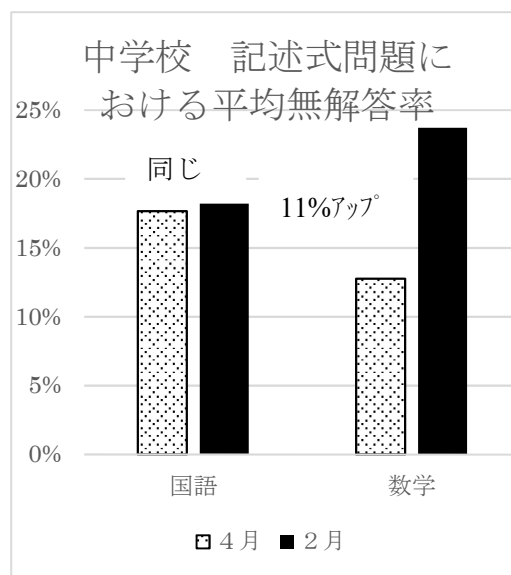
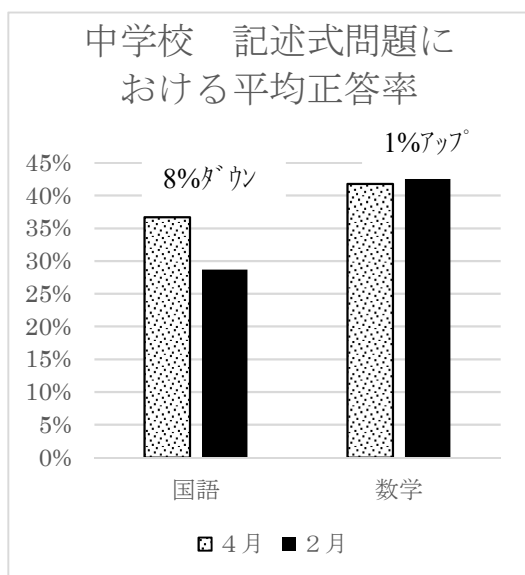
## 3. 推進地区としての実践研究の成果の把握・検証

本事業の趣旨が志摩市における学力向上の取組の趣旨と重なっているため、本事業を市の事業の両輪として取り組んできた。以下に市全体の成果の把握、検証を記す。

成果の把握、検証については4月、2月に実施された、みえスタディ・チェックの比較を基に行った。(以下グラフ参照)「知識・技能を活用する力」は記述式問題の正答率に顕著に現れる。これは、全国学調でも課題とされていた部分である。

今回小学校においては、国語、算数とも平均正答率が伸び、算数科においては、無解答率が改善され、特に協力校においては、4月に実施されたみえスタディ・チェックでは、平均無解答率が県の平均無解答率よりも高かったのに対し、本事業の研修を進めた後に実施された2月のみえスタディ・チェックでは、平均無解答率が県の平均無解答率よりも低くなっており、大きな改善が見られた。一方、中学校においては、改善の兆しは見られなかった。





「知識・技能を活用する力」については、本市において、毎年学調の分析結果から課題としてあげられてきた。どのように力をつけていくとよいのか、授業改善の視点から考えたり、生活習慣、学習習慣との関わりから考えたりしてきた。特に生活習慣、学習習慣については、学校に実態の応じ、独自で様々な取組がされてきた。

授業改善について各校校内研修のあり方に目を向けたとき、小学校では、教科やつきたい力が絞られ、ポイントを絞った研修が行われているが、中学校では、教科が多岐にわたるなど、ポイントを絞った研修が進めにくい傾向がある。また、本市においては、全国学調の学校質問紙から学力に焦点を当てた小中学校の連携に課題が見られた。

#### 4. 今後の課題

本事業の趣旨を踏まえ、協力校への支援を中心としながら、その両輪として、志摩市の学力向上に向けた取組も更なる充実を図っていく。

特に、中学校の校内研修の充実と学力向上に向けた小中学校の連携が今後の大きな課題となる。これらを中心に、研究課題に対し、協力校の取組を常に念頭に置きながら志摩市学力向上検討委員会、志摩市授業研究指定校事業の更なる充実を図って行きたい。またそれを下支えする取組にも力を入れていく必要がある。以下に重点とする内容を挙げる。

##### (1) 志摩市学力向上検討委員会

引き続き、全国学調から児童生徒の学力を定量的に検証するとともに、分析を通して授業改善を図っていく。また、「教員の学びの場」「情報共有の場」といった視点に立ち、三重県教育委員会の指導も仰ぎながら研修を進めていくとともに、協力校の取組の成果と課題についての検証の場としていく。

##### (2) 志摩市授業研究指定校授業

本年度は、「研修が一部の教員のものになっていて全体のものになっていかない」「児童の実態についての話が多くとられ、授業内容についての検討が不十分である」といったことが課題として挙げられた。発表校における授業研究が、協力校を始めとする市内の教職員にとって有意義な研修の場となるよう指導・助言を行っていく。

### (3) 協力校への指導助言

市教育委員会指導主事の学力向上推進部会への定期的な参加や日々の学校参観により、計画・実践・検証・改善を行っていくこととする。

### (4) その他

研究課題を下支えする取組として、引き続き、市健康福祉部健康推進課と連携し、情報共有をするとともに、児童生徒の生活習慣、学習習慣における課題について、地域全体で考えていくという方向で進めていく。また、市教育委員会における指導主事学習会の更なる充実を図り確かな共通理解をもって指導・助言にあたっていく。

(様式3)

「課題発見・解決に向けた主体的・協働的な学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成28年度委託事業完了報告書

【協力校】

都道府県名	三重県	番号	24
-------	-----	----	----

協力校名	三重県志摩市立神明小学校
------	--------------

## ○ 協力校として実施した取組内容

### 1. 当初の課題

本校の児童は、課題に真面目に取り組み、やり遂げようと努力する子が多いが、一方では、自分の思いや考えを言葉で表現することが苦手でうまくコミュニケーションができない傾向がある。

また、過去数年間の全国学力・学習状況調査（以下「全国学調」という。）を見ても、「問題の意図を読み取り、自分の考えや根拠をもとにしながら、説明したり、文章にまとめたりすること」や「自分の立場を明確にして意見を述べること」などに課題が見られる。

<課題>

- ・読み取ったことを基に、自分の考えや意見を述べたり、内容を整理してまとめて書いたりすることに課題がある。
- ・大勢の中では、話せない子どもがいる。
- ・書くことに苦手意識のある子どもが多い。

### 2. 協力校としての取組状況

#### (1) 児童の実態把握について

- ・新しい単元を学習する前に、レディネステストやアンケートを実施した。子どもたちの理解状況を把握するためのレディネステストは「学級全体の傾向を知る」「児童一人ひとりの理解度を知る」「未習内容の理解度を知る」といった視点で構成されたテキストを用いた。また、学習に臨む前の子どもたちの情意面の把握のために学習内容を簡単に紹介したり、これまでの学習内容を振り返ったりしながらアンケート等を通して学習への思いを把握していった。これらから得た情報をもとに単元構想や学習支援サポーターの支援のあり方について検討し、授業実践の充実を図った。
- ・毎時間のめあてに対する振り返りを行い、児童の理解度・満足度を知るよう努めた。
- ・単元の終わり、学期末にペーパーテストを行い、個々の習熟や課題を把握した。
- ・単元テスト等の誤答分析を行い、誤答の多かった問題については重点的に復習を行い、担当者間で指導方法を振り返る等の取組を行った。

#### (2) 効果的な学習集団編制について

- ・単元に入る前に、レディネステストやアンケートを行うことで、個々の習熟の程

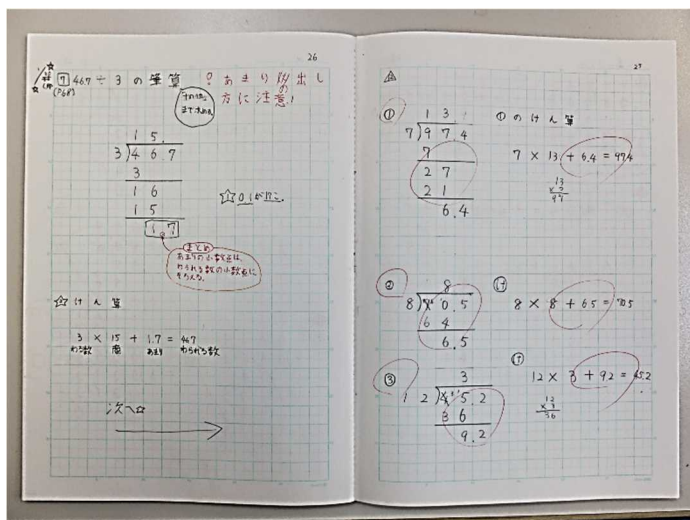
度を把握した。単元に入る前だけでなく、必要に応じて、単元の途中でも理解を深めるための補充学習を取り入れた。

- ・ペア学習やグループ学習を取り入れ、意欲的に発表する姿勢を育むために、自分の考えを話す機会を増やした。
- (3) 補充的な学習、発展的な学習について
- ・全国学調、みえスタディ・チェックの採点を全教員ですることにより児童の様子を学校全体で把握した。また、自校の強み、弱みについても校内研修で交流することにより、学校の成果と課題を把握した。
  - ・朝の学習の時間に、全校で前年度までの既習学習の学び直しや反復練習を行う等補充的な指導を行った。
- (4) 指導の工夫について
- ・視覚的支援の充実を図るため、拡大図を準備したり、具体物を操作させたりすることで、イメージを捉えさせることができた。また、机間指導の際に、教師がホワイトボード等を使って視覚的な支援を行った。
  - ・みえスタディ・チェックの分析をとおして、書く活動に慣れさせるために、自分の考えをノートに書く活動を多く取り入れた。
- (5) 評価について
- ・ノートの点検や練習問題点検を必ず行い、毎時間行う振り返りから、児童の満足度、学習内容の定着状況、学習意欲等を把握した。
  - ・休み時間等も使いながら担当者間の連携をできるだけ多く行い、指導方法や評価情報を共有し、指導改善に取り組んだ。

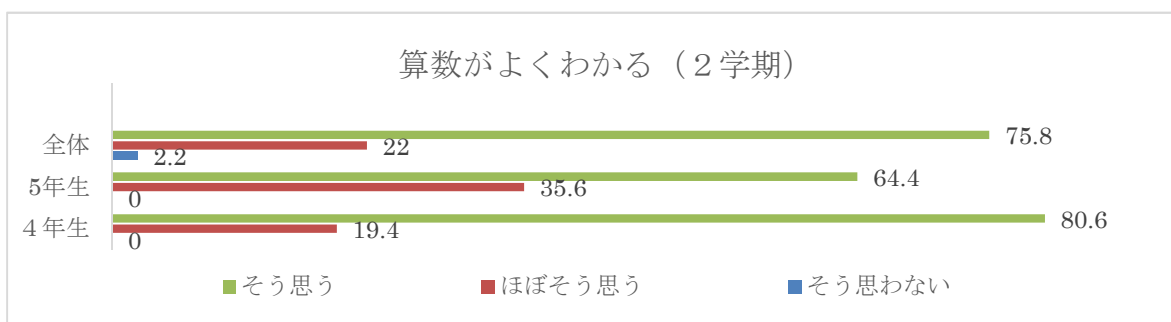
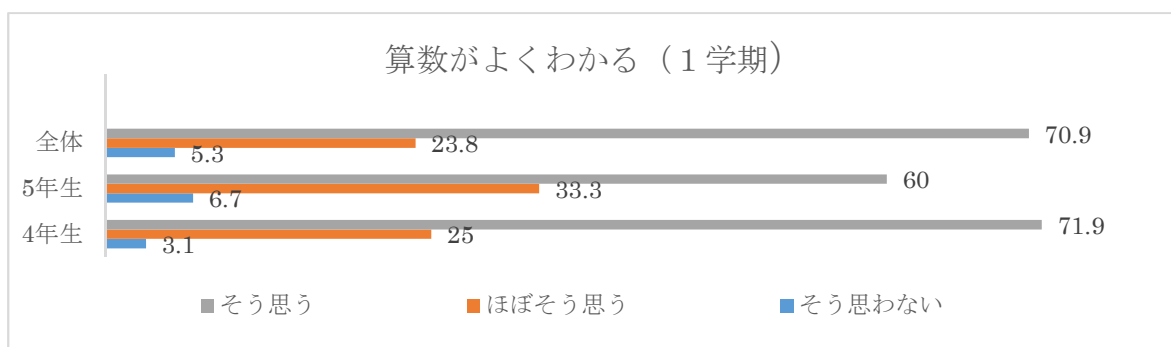
### 3. 取組の成果の把握・検証

#### (1) 児童の実態把握について

- ・レディネステストやアンケートを実施した結果、時間の経過とともに定着が曖昧になっている児童が多いことがわかった。そのため、日常の授業における児童の観察（学習態度・発表・ノートなど）を行い、記録していくようにした。毎時間のめあてに対する個々の理解度・満足度を把握し、次の授業に生かしていくことができた。また、指導者が複数いることで児童のつまずきや間違いやすい傾向を早期に把握できた。
- ・単元の終わりや学期末にペーパーテストを行い、個々の習熟や課題を把握してきた。10月から学習支援サーポーター等の活用を行ったことで、1学期より2学期の方が到達度が数ポイント上がった児童も数人いた。また、5年生では単元によっては、到達度が数十ポイント上がった児童が数人いた。また、児童の学習意欲が向上していることが、授業態度やノートの工夫からも把握できた。
- ・毎学期末に実施している学校生活アンケートでは、1学期には「算数の勉強がよくわかる」という項目で全校の5.3%の児童が「そう思わない」と答えていたが、2学期には、2.2%へ



と減少した。特に、学習支援サポーターを活用している4・5年生では、「そう  
 思わない」と答えた児童は0%であった。学習支援サポーターは、事前の児童把  
 握をもとに個に応じたきめ細かな学習支援にあたり、ペア学習やグループ学  
 習の際には話し合いの停滞しているところに入り、話し合いの舵取り等をした。  
 また、学習内容の定着を図る時間には、クラスを習熟度別に分け、主に定着の早  
 いグループの学習支援にあたった。その結果、学習支援サポーターが子どもたち  
 に関わることで、子どもたちの学習に対する満足度の向上につながった。また、  
 理解の深まりや学力の定着にも有効であると考えられる。



## （2）効果的な学習集団編制について

- ・算数では単元に入る前にレディネステストやアンケートを行うことで、児童の現  
 状や抱える課題が明確になり、TT指導や習熟度別指導をより効果的に進めるこ  
 とができ、学習意欲の向上につながった。また、グループを分けるときに、児童  
 自身が決める形にしたことも、学習意欲の向上につながっている。
- ・校内研修において「表現する力」を育むことを掲げ、少人数での話す（説明する）  
 活動をより多く取り入れたことで、全体での発表が苦手だった児童が自分の考え  
 を発表する姿がたびたび見られるようになった。

## （3）補充的な学習、発展的な学習について

- ・全国学調、みえスタディ・チェックの採点を全教師ですることにより、児童の成  
 果と課題を学校全体で把握することができた。また、自校の強み、弱みについ  
 ても校内研修で交流することにより、学校としての課題を把握することができた。
- ・朝の学習の時間に、全校で前学年までの既習学習の学び直しや反復練習等補充  
 的な指導を行ったことで、基礎基本の定着に効果があった。また、短時間で学習  
 に取り組む習慣が付き、それが授業の中でも生かされてきている。

## （4）指導の工夫について

- ・視覚的支援の充実を図るため、拡大図を準備したり、具体物を用意し操作させ  
 りすることで、イメージを捉えさせ理解を深めることができた。また、机間指  
 導の際に、教師がホワイトボード等を使って視覚的な支援を行ったことで、以  
 前と比べより多くの児童が深く理解できるようになった。

- ・みえスタディ・チェック等の分析から明らかになった課題である文章問題や計算の工夫、条件に合わせて指定された文字数で答える問題、ローマ字の書き取り等については、意識して繰り返し反復練習を行った結果、問題の意図について理解し、より短い時間で解答できるようになった。
- ・自分の考えだけでなく、途中の式や筆算・説明の式を省略せず書くようにする等子どもたちの豊かな発想や考える力を育成するよう努めた。

#### (5) 評価について

- ・ノートの点検や練習問題点検を必ず行い、毎時間行う振り返りから、児童の満足度が向上していることがわかった。複数の担当者が指導に当たることで児童のつまづきを早い段階で把握でき、きめ細かい指導ができたことで、学習内容の定着により効果が見られた。また、休み時間等も使いながら担当者間で情報を共有し、指導方法や評価について具体的に検討して指導改善に取り組んだ。

#### 4. 今後の課題

本校の実態として、まだ基礎・基本が定着していないこと、書く力に問題がある児童が多いこと、自分の考えを発表することが苦手な児童がいることが課題としてあげられる。今後、確かな学力を育成していくために、特に、次の点についての取組を充実させていく必要がある。

- ・基礎・基本のさらなる定着に向け、既習内容を定期的・継続的に復習する機会や習慣の定着。
- ・T T指導や習熟度別指導の効果的な指導方法の工夫と評価情報の共有等、担当者間の連携の充実。
- ・少人数による学び合える学習形態を生かした授業等のさらなる授業改善。